

今年度の研究を通して

私たちは「よい保育（質の高い保育）」を求めて日々、研究に努めてきました。では、「よい保育」とはどのような保育を指すのでしょうか。誰が「よい保育だ」と評価してくれるのでしょうか。本園では正規保育の時間も、預かり保育の時間も幼児の主体性を重んじた遊びを主とした保育をしています。幼児一人一人の興味関心は様々で、遊んでいる場所もまちまちです。そのような中で、教師は幼児を見守りながら、適切な言葉をかけ、遊び道具を提示したり、仲間との関係を仲介したりして子どもの学びを支えています。小学校以上で行われる授業とは異なり、教科書もなければ、指導案もありません。研究授業にかわる研究保育や公開保育という機会はあるけれども、教師が参観者から見続けられることはほとんどありません。保育という営みは教師の目の前で刹那的に過ぎ去っていきます。したがって教師は自分の保育を自分に問うしかないのです。問い続けなければ停滞してしまいます。

本園での、一日の保育後の担任と副担任の会話や週に一回の全保育担当者によるカンファレンスはとても和やかです。難しいことを語り合っている様子はありません。しかしながら、担任が記している週案である「のびのびシート」には、担任の迷いや困り感が読み取れます。「のびのびシート」に毎週目を通してきた私は、担任の変容の過程に気付きました。年度初めの頃は、幼児の遊びについて記されることがほとんどです。様々な様相を示す幼児を把握し、興味関心の対象や幼児の性格等を捉えようとしている担任の姿があります。時が経つと、遊びの道具や言葉かけ、援助の仕方についての葛藤の記載が多くなります。この時期は長く続くのですが、並行して自分の保育に対する記述が増えてきます。3学期になると担任のメタ認知に関する内容が毎回記録されるようになるのです。

「よい保育」とは、教師自身が自問自答しながら、日々、幼児や教具、環境と向き合うことがベースになって行われるものなのです。本園ではこのPDCAサイクルが毎日まわり続けています。コロナ禍の令和2年度も、いえ、コロナ禍という未曾有のスタートだったからこそ、これまで以上に教師はアンテナを高く張り続け、「よい保育」を模索し続けました。その結果、本園では教師間の対話が生まれ、幼児の反応や変容を指標として保育改善が日常的に実践され、幼児の健やかな成長に直結していきました。教師も幼児もこのサイクルの良さを実感できたからこそ、職場には笑顔が絶えませんでした。このようなカリキュラムマネジメントを、私が以前勤務していた小学校では、「天使のサイクル」と呼んでいました。

緊急事態宣言発令後から約2ヶ月間、幼児の声が全く聞こえない職場で、花が咲き、オタマジャクシが大きくなっても、春が来た喜びは感じられませんでした。臨時休業が明けた最初の登園日、園に天使が返ってきたように感じたのは私だけでしょうか。私には花も木々も、池や野の生き物も、見上げた青空さえも、息吹をもらったように輝いて見えました。教師にとっては自問自答の葛藤の日々が始まりましたが、穏やかに天使のサイクルがまわり始めたのです。 <副園長>

一年間を通して職員とカンファレンスを行う、そして幼児の姿の記録から職員間の共感・合意を得る。なんて幸せなのだろう。常に一体感のある保育ができるのである。不安なことも、やってみたくとも素直に声に出せる職場は、実は少ないのではないだろうか。そして、それが自己の保育の在り方を問い続け、更新していくことにもつながるのである。正直、「評価」という言葉に良い

イメージをもったことはない。「査定」されるほど保育に自信をもっていなかった。今は、むしろ失敗の方が話しやすく、そして「話したい」。このモチベーションであり心持ちは、職員だけでなく、幼児にも伝わっているのではないだろうか。 <4歳クラス担任>

評価観を導き出した1年間。カンファレンスで、アンケート項目ごとに付箋を持ち寄り、互いの考えを伝え合い、付箋を貼り、俯瞰して語り合った。その一連の流れが私にとって意義深かった。保育をしている中で「どうしようか」と迷うことは多々ある。そして「援助してみたけれど適切だったのか」と振り返る。カンファレンスで導き出した共通項目があるからこそ、一人よがりなものにならず、みんなの総意を踏まえた振り返りと次への方向性を考えることができた。保育を行う上での安心感につながっている。

また、評価観として表された「言葉」には、カンファレンスで持ち寄ったたくさんの付箋、語り合った思いが内包されていると思っている。評価観を導き出した過程を通して、私自身、保育に対する考えが深まった。自分の軸になっていると感じる。 <5歳クラス担任>

昨年度は、迷いながら手探りでやってきた感じがするが、今年度、共通認識を出したことで保育の方向性がはっきりしてきた。また、カンファレンスを重ねるごとに職員の心もちを確認することができ、今までよりも自信をもって保育ができるようになったと感じる。 <3歳クラス副担任>

昨年度と今年度に積み重ねた振り返りをもとに共通認識を確認することができた。また、共通認識があることで職員が同じ方向に向かって安心して保育を行うことができてよかった。

<4歳クラス副担任>

“評価”というと、幼児に対して○か×で当てはめるイメージでありよく思っていなかったが、附属幼稚園の評価は職員の保育について評価をするということで驚いた。また、共通認識があることにより独りよがりではない保育ができたと感じる。疑問に思ったことや困ったことを他の職員に尋ねることで、私自身安心して保育を行うことができた。 <5歳クラス副担任>

クラス関係なく遊戯室や園庭で子どもたちと関わる際や、突然どのクラスに保育補助に入ったとしても、担任や副担任、他職員と同じスタンスで違和感なく過ごすことができていることを実感している。振り返ってみると、カンファレンスを通して、一つ一つ保育の目指す方向性や考え方を確認し合ったこと、エピソード事例で附属幼稚園らしさをマーカーで記し職員が同じ思いであることがはっきりと確認できたことが、附属幼稚園の保育の目指す方向がはっきりし、自分が幼児と向き合う際の援助に、自信と確信が持てるようになったのだと思う。 <養護教諭>

附属園の取組へのコメント：評価についてみんなで考える取組

上越教育大学 白神敬介

はじめに

2020年度は世界的なコロナ禍により、多くの人々がこれまでとは異なる新たな生活様式を模索しました。そのような中で保育・幼児教育の現場においても感染症予防・拡大防止のための対策や登園自粛・臨時休園を実施するなど通例とは異なる対応に迫られることとなりました。こうした感染症への対策はこれからも継続的に実施する必要がありますが、一方で、保育・幼児教育の現場における保育の質の向上を図っていくことも求められています。これら二つを両立することは、保育・幼児教育現場における大きな課題であるといえます。そのため、これからの保育・幼児教育の現場において活動に従事する人々が望むと望まざるとにかかわらず、現場の取り組みを変えていかざるを得ない状況が生じると考えられます。

上越教育大学附属幼稚園（以下、附属園と表記）は2020年度の研究テーマを「子どもを支える保育—評価を通して—」とし、コロナ禍のなかでも継続的に研究に取り組み、その成果をまとめられています。2020年の研究活動については感染症対策のために当初の予定通りには進まなかった部分もあると思います。しかし、そのような状況の中で、特に「評価」に関する見方・考え方を施設内のスタッフのなかで共有し、言葉に表していった取り組みは、大きな意義をもっていると言えます。それは、これからの新たな生活様式に向けて変えざるを得ないことがあったとしても、その現場のなかで本当に大切にしたい保育・幼児教育の在り方が何なのかを改めて考え、それを皆で共有し、その考えに沿った取り組みの実現につながっていくと考えられるからです。附属園の取り組みは、人々が大事にしたいものは何なのか、それをどうした継続していくことができるのかについての具体的な方策を示したと言えます。

本稿では、附属園の取組の意義についてこれからの幼児教育の在り方に関する議論を踏まえて、補足的なコメントを述べていきます。なお、本稿は、保育の質をめぐる議論や、これまでの附属園の取組を下敷きにしていますが、その内容についての詳細は、2019年度の報告書をご参照ください。

「評価観」について考える意味

2020年度の附属園の研究計画では「保育の評価観を見出す」ことがキーワードに挙げられています。この「評価観」という言葉は、「評価とは何か」についての附属園の職員の見方・考え方を示すものと言えます。評価とは、目標に対して実践がどのような役割を果たしたかについて捉えることです。その際に、目標が達成されたかどうかをどのように判断するのかについて保育者同士の相互の共通認識が必要になります。それがなければ、評

価を踏まえて実践活動を改善していくことはできません。それはゴールを決めずに、マラソンを走り続けるようなものです。

そして、評価観について検討することは、自分たちにとっての評価をすることの意味や、評価のやり方を考えることでもあります。つまり、附属園の研究テーマである「評価観を見出す」ことは「評価とは何か」あるいは「評価は何のために行うのか」「評価するというのは何をするのか」という疑問への答えを導き出していくことと言えます。こうした取り組みは、保育者にとって「評価をやらされる」「ただただ負担となる評価」といった認識ではなく、自分達にとって「評価に取り組みたい」「やる意味のある評価」という認識をもたらすのではないかと思います。評価観に対する共通認識を見出すことは、評価の仕組みがうまく回るための潤滑油のような役割を果たしていると言えるでしょう。

「保育の質の向上」のために「評価観」を見出す

附属園で示された評価観についての共通認識の内容をみると（研究のアウトカム・プロセスの1ページ目を参照）、保育を評価する目的や、子どもの育ち（学び）の成果に対する認識など、いずれも評価を進めるうえで重要なポイントが示されているように感じます。そのなかで特に5番目の「保育の質の向上をどのように捉えているのか」というポイントについて考えを深めてみようと思います。

そのために、まず「保育の質」を検討する意味について確認します。保育の質の向上は保育・幼児教育施設において大きな課題であり、そのための取組においては自己評価が重要であると指摘されています。「保育の質」については様々な議論があり、一元的に定義することはできないという指摘もあります。しかし、「保育の質の向上」がそれぞれの施設・現場において重要であるならば、それがどんなものであるのかについて保育者一人ひとりが自らの保育実践を踏まえて、他者に説明できるような具体的な認識を持つておく必要があるでしょう。

「学びの物語（Learning Story）」の日本での実践に取り組んでいる大宮勇雄氏は、著書『学びの物語の保育実践』のなかで「保育の質を自分の言葉で語れなければ意味がない」と述べています。保育者自身が「保育の質」を自らの言葉で語るができなければ、何を目標として保育実践やその振り返り（自己評価）をしていけば良いのかを見通すことができません。また、「保育の質」が何かということについて、優れた実践者や専門家が語る言葉や説明をそのまま取り入れたとしても、そこで語られた「保育の質」が自分たちの保育実践に合致したのかどうかはわかりません。なぜならば、それぞれの保育・幼児教育施設の保育実践の営みや目標は、その施設の歴史や文化的な背景のなかで積み上げられてきたものであり、「外部」から輸入された言葉を使っても、その実践をうまく語るができない可能性があるからです。したがって、保育実践を振り返り、より良い保育を進めていくうえでは、自分たちの言葉で「保育の質」を語る事が重要と言えます。

その点を踏まえると、附属園の取組において「保育の質の向上をどのように捉えているか」というポイントについて、自分たちの言葉で共通認識を具体化したことは重要です。これによって、より良い保育活動を構成していくための振り返り（自己評価）をする際の方位磁石をもつことができたと言えるかもしれません。それは外部から与えられた言葉ではなく、保育者間の共同的な話し合いのなかで導き出されたものであるという点も重要だと言えます。ただし、報告書の「検討プロセス」では、5番目のポイントを検討する際に、一度のカンファレンスでは十分ではなく、二度のカンファレンスを要したことが示されています。ここから、「保育の質」を語ることは容易なことではないことが示唆されます。しかし、こうしたプロセスを経て共通認識の具体化に至ったことが、保育者の同僚性の構築に有効だったとも言えます。附属園の保育者の取組に対する感想が示された「今年度の研究を通して」のなかでは、「保育の方向性がはっきりしてきた」という言葉や「職員が同じ方向に向かって」という言葉が書かれています。保育者が自信をもってこのような言葉を発することができるのは非常に大きな成果だと言えるのではないのでしょうか。

取組の社会全体における位置付け

附属園の取組は、附属園の保育者にとって有意義な成果を導くことができたと言えますが、さらに他施設や社会全体にとっての意味について検討する必要があります。

文部科学省幼児教育課のとりまとめによる「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」から、2020年5月に報告書『幼児教育の質の向上について（中間報告）』が示されました。そのなかで、幼児教育の質の向上のための具体的方策の6つの柱立てのひとつに「3. 幼児教育の質の評価の促進」があります。このことは、幼稚園等において評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすことが今後より一層求められていることを表します。そして、その具体的方策である「幼児教育の質の評価に関する手法開発・成果の普及」として、「子供の学びの過程や教職員の指導、施設の運営や環境等に対する評価を行う際の観点や方法に関する指針や留意事項等の作成等、幼児教育の質に関する評価の仕組みの構築に向けた手法開発・成果の普及といった取組の充実を図る。」ことが示されました。この説明に書かれた「評価を行う際の観点」や「指針や留意事項等」がどんなものであれば良いのかは明確ではない部分はありますが、日本の幼児教育の特徴もしくは各施設の特徴を踏まえて作成していく必要があると考えられます。

こうした日本の幼児教育の方向性と附属園の取り組みは軌を一にしていると言えるでしょう。2019年度に形作られた附属園の評価の仕組みは、「評価に関する手法開発」です。2020年度の取組として評価観を共同的に具体化していったプロセスは、評価の方法に関する指針や留意事項等を作成するプロセスに位置づけられます。そのため、附属園の取組は今後、各幼稚園等で評価に取り組むうえで参考事例になると言えます。

一方で、他施設が附属園の取組を参考にするためには、実際にその取組が他所での取り入れられることを想定した実効性や応用性について検討することが重要です。報告書『幼

児教育の質の向上について（中間報告）』の「3. 幼児教育の質の評価の促進」のなかには、「・・・各園が近隣の園と合同研修を実施したり、外部の視点を入れた活動の見直しを行う。」と記載されています。成果を広く社会に共有・還元していくためには、他施設の保育者の目線を通じて附属園の取組について検討したり、あるいは取組を一部導入したりして経過を追うなどといった検討により、外部の視点に基づく見直しや普及が求められます。この点は附属園の取組における今後の課題であると考えられます。

附属園の取り組みを参考にするうえで

附属園が導き出した共通認識は附属園のこれからの教育活動を考えるうえで大切な基盤になるものです。また、保育・幼児教育に携わる他施設の皆様にとっても有益なものになり得ると思います。ただし、それは附属園の共通認識そのものが他施設の方々にとって有意義なものになるということではありません。なぜならば、共通認識として示された言葉の意味を保育・教育実践に即して理解できるのは、それを共同的なプロセスのなかで示してきた附属園の職員だけだからです。共通認識として示された言葉に対して、その言葉への実感を伴った納得がなければならぬのです。そのような実感を伴った納得が得られるためには、言葉（共通認識）と一緒に確認していき、意味のすりあわせをするプロセスが必要です。

したがって、附属園で示された共通認識は、他施設でそのまま参考になるものではありません。しかし、共通認識を導き出したプロセスは参考にすることができると考えられます。附属園の取組のようなプロセスを経て導き出された共通認識は、その施設における保育・幼児教育活動の重要な基盤に違いありません。あるいは、そのプロセスを経ても、うまく共通認識が導き出されなかった、あるいは良い言葉にまとまらなかったということがあっても、その結果は今後の課題を示すものとして有意義なものではないかと思います。いわば、共通認識を確固としてもものとして導き出すことが大事なのではなく、共通認識と一緒に考え続けていくことが大事ということになります。

最後に、個人的な感想になりますが、附属園の共通認識はとても素敵な言葉で示されていると思います。一方で、この言葉はどういう意味なんだろうか、どうしてこの言葉にしたんだろうかと気になる部分もあります。もし、同じように感じた人がおられましたら、ぜひ附属園の先生方に尋ねて下さい。聞くことにより、対話が生まれます。対話は、お互いの認識や考え方を深めるプロセスです。そのプロセスによって、保育・幼児教育において自分（達）が何を大切にしようとしているのかを考える一助になるのではないかと思います。

<引用文献>

大宮勇雄. (2010). 学びの物語の保育実践. ひとなる書房.

文部科学省: 幼児教育の実践の質向上に関する検討. (2020). 幼児教育の質の向上について（中間報告）. 〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/140/mext_00385.html〉